



Title	シラ-崇拜とナチズムとイエ-ナ大学 1933/34
Author(s)	杉浦, 忠夫
Citation	明治大学教養論集, 395: 7-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8129">http://hdl.handle.net/10291/8129</a>
Rights	
Issue Date	2005-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# シラー崇拜とナチズムとイエーナ大学 1933/34

杉浦忠夫

## 1

1933年1月30日のヒトラーの政権掌握をもって始まる「国民的高揚」と、同年3月5日の国会選挙の結果を背景にして、ドイツ全州の政治的制覇と「画一化」Gleichschaltungによる一党独裁体制の基礎固めができあがった。だがよく知られているように、この時点ですでにドイツの大学は、ほとんど例外なく大学の画一化政策にも「指導者原理」Führerprinzipの導入にも、抵抗らしい抵抗をなんら示さずに、いなむしろ自ら進んで大学のナチ化推進に協力・順応さえした。とはいえ、ナチ党の大学政策に順応した大部分の教授たちのなかに、自己の学問的信念と良心に基づき、また市民的勇気 Civil-courage に従って抗議を試みた一握りの勇気ある教授たちもいるにはいた。しかしほとんどの（とくにユダヤ系の）教授たちは国外亡命を余儀なくされるか、でなければ沈黙を強いられて止むなく内心の抵抗を抑えて、国内で屈辱と負い目に荷まれながら、苦汁の学究生活を1945年の敗戦まで送らざるをえなかった。

ドイツの大学の「自発的画一化」Selbstgleichschaltung とも、「ドイツ精神の自己斬首」Selbstenthauptung des deutschen Geistes とも呼ばれる70年前のこの汚辱の歴史は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト伝来の

新人文主義的の大学理念と、それに基づいて発展した19世紀ドイツの輝かしい「学問の世紀」に照らしてみれば、ドイツの学問・大学の歴史に拭い難い屈辱的な一大汚点であった。こうした汚辱にまみれたドイツ大学の歴史のなかで、ナチ党の政権掌握の前年1932年8月26日に成立した最初のナチ党によるテューリンゲン州政権を背景にして、イエーナ大学は、いち早く他大学に先んじてナチズム主導の模範的な「政治的の大学」Politische Hochschule たらんとする積極的の姿勢を示した。

イエーナ大学は、その際、かつて史学・美学教授としてイエーナ大学に在職(1789 SS-1799 SS)した詩人シラーを、ナチズム的の大学編成のための象徴的人物として前面に押し出し、大学名にシラーの名を冠して、Friedrich-Schiller-Universität Jenaと改稱することで、「褐色の大学」の範例たらんとする姿勢を明示した。

## 2

イエーナ大学のナチ化過程は、1929年に2名のナチ党員がテューリンゲン州政府に参加した時に始まった<sup>1)</sup>。かつてヒトラー一揆(1923)に参加したナチ党NSDAPの古参闘士フリック(Wilhelm Frick, 1877-1946)は、1930年1月23日、内務・国民教育相の職権を利用して、数学・自然科学部の反対を強引に押し切り、『ドイツ民族の人種学』(„Rassenkunde des deutschen Volkes“, 1922-43, 売上部数27万)の著者で熱狂的な人種差別主義者として有名なギュンター(Hans Friedrich Karl Günther, 1891-1968)をイエーナ大学教授として招聘し、悪名高い「人種学」(Rassenkunde)の講座を開設させた<sup>2)</sup>。イエーナ大学ナチ化の第一弾ともいふべきフリックのこの措置が、いかにナチ党首脳部を歓喜させたかは、同年11月15日のギュンターの就任講義(「民族移動時代以降のドイツの人口の人種学的変化の諸原因」)が、総統ヒトラー、ゲーリング、上記フリック、そのほか党幹部らの

出席する満員のイエーナ大学講堂で行われたことからしてもわかる。

褐色の制服で埋まった講堂でのギュンターの就任講義は、イエーナ大学教授によるイエーナ大学のナチ化に向かっの自発的参加の先駆けであり、やがて大戦突入後のホロコーストに至るナチズム的人種理論の公的な御披露目の式典であった。就任講義のあと、大学本館の道路の向う正面に立つ有名なホテル (Hotel „Schwarzer Bär“) でギュンター教授歓迎の祝宴が開かれた。席上ゲーリングは、ギュンター教授の招聘は、「腐った体制の腐った者どもに対する戦いで勝利した戦勝祝賀会である」と、ギュンターのイエーナ大学就任を誉めちぎった。

派手やかなギュンターの就任講義の11日前 (1930. 11. 4) に、同じ大学講堂でヴァイマル在住の作家で文学史家のバルテルス (Adolf Bartels, 1862-1945) が、「テューリンゲンの作家たち」と題して講演を行なった<sup>3)</sup>。バルテルスは郷土文学 (Heimatlidung) の理論家でその代表作家であるとともに、フリック同様名うての国粹的人種主義者で、激しい反ユダヤ主義者としても有名であった。かれは早くも1924年に『ナチズムはドイツの救い』 („Nationalsozialismus Deutschlands Rettung“) を書いて、ナチ党の進出を熱烈に歓迎、1928年に設立された「ドイツ文化のためのナチズム闘争同盟」 (NS-Kampfbund für deutsche Kultur) というナチズム組織の有力活動家であった。

1930年代の到来とともに、ギュンターやバルテルスの社会人類学や、それに基づく文学理論と、völkisch (民族至上主義的) なイデオロギーで飾られた擬似科学がイエーナ大学の講壇を賑わせた。その後、「人間育種論と遺伝研究」「民族性理論と辺境学」「海洋史と海洋威信論」などなど、ナチ侵略イデオロギーを補完し正当化する時局便乗型の新講座が続々と開設された<sup>4)</sup>。

## 3

以上の展望から、ナチ党の政権掌握による一党独裁体制が全ドイツに浸透する以前に、イエーナ大学はナチ党の構想する政治的大学の範例たりうる用意ができ上っていたことがわかる。従って、指導者原理の大学への強制的導入に先んじて、州の文教当局と大学側がシンボルとしての一人物に改革さるべきイエーナ大学の先駆者の役割を荷わせようと考えたとしても、またシンボルとして選ばれた人物がフィヒテでもニーチェでもゲーテでもなく、シラーであったとしても不思議はあるまい。1930年のはじめ、ヴァイマル共和政末期に至って急速に盛り上がってきた国粹主義的(völkisch)な気運と、ヴァイマル体制に代わって新時代の到来を予言し先導する創造的英雄像を待望する時代の雰囲気を考えれば納得できるだろう。また、かつてイエーナ大学教授としての就任講義『普遍史とは何か、また何のためにこれを学ぶか』(1789)でもって、18/19世紀転換期のイエーナ大学の黄金時代の端緒を作ったばかりか、19世紀全般を通じて「国民詩人」(Nationaldichter)としての国民的人気を保ちつづけてきたシラーを、郷土の仰ぐべき時代の創造的英雄として歓迎したのも至極当然であったろう。

このような折に、シラーの政治化を促進する恰好の一書が出回った。ナチ党の政権獲得の前年1932年にナチ党員の国会議員ファブリーツィウス(Hans Fabricius, 1891-1945)は、『ヒトラーの戦友としてのシラー。シラーの戯曲に現われたナチズム』(„Schiller als Kampfgenosse Hitlers. Nationalsozialismus in Schillers Dramen)を公刊した。ファブリーツィウスは、このなかで「シラーは国民社会主義者(Nationalsozialist)であった」と断定したうえで、「国民社会主義者としてのシラー！ われわれは誇らしげにシラーを国民社会主義者として迎えてしかるべきだ……シラーが輝かしいハーケンクロイツ旗を先頭に押し立ててヒトラーと並んで行進せんことを」と宣

言した<sup>5)</sup>。

副題からわかるように、本書は『群盗』から『ヴィルヘルム・テル』に至る戯曲群の登場人物の口を藉りて、何が何でもシラーをナチズムの先駆者たらしめようとする政治的意図から書かれている。ファブリーツィウスのこの書は、1934年に第2版が、1940年には第3版（そのさい『われわれの戦友シラー。国民社会主義者シラーの戯曲を味う』と改題）を重ねたというが、これからすると、シラーをナチズムの先駆者とする政治的操作は、ナチ政権下でかなり広範囲にわたって機能していたことがわかる。

#### 4

シラーの政治的利用がイエーナ大学に初めて公的に持ち出されたのは、1932年1月18日に行われた恒例の第二帝制建国記念日においてである。この日、フリックに代って州政府の内務・国民教育相に就任したヴェヒトラー（Franz Wächtler, 1891-1945）の臨席のもと、法学部教授（刑法）ゲアラント（Heinrich Gerland）が「シラーと法」と題する祝賀演説を行なった<sup>6)</sup>。ゲアラントはシラーのリベラリズムとナチ・イデオロギー、とくに指導者原理と民族主義的世界観は本質的に一致することを立証し、今日対立し合っているのはリベラリズムとナショナリズムではなく、個人主義か集合主義かの差が存在するだけだと説く。ゲアラントはいくつかの対立概念を持ち出して、シラーとナチズムの本質的一致を証明したいらしい。かれは「国民社会主義の偉大な運動とその基本的イデオロギー、この運動の最終的原理的に要求するもの」を認めよと叫んで、こう結論する。「集合主義が論理的必然性をもって祖国の理念を否定すべく強制されて、国際的なもののみを考案の対象とすることができるのに対して、国民社会主義が国民的なものをすべてのものの上に置くならば、国民社会主義はこれまた絶対にシラーと一致する」。

ゲアラントはもともと DDP（ドイツ民主党）所属の国会議員であった<sup>7)</sup>。

それだけにヴァイマル共和政の崩壊とナチ党の躍進との重なり合うこの時期(1930-33)に、シラー崇拜をナチ党寄りに軌道修正しようとするゲアラントの論法がきこちなく円滑さを欠いているのもうなずける。実際、この時期の反ヴァイマル・親ナチ教授連の煽動的論説の多くが——時流への迎合を急ぐ余りか——論理的整合性を欠く(既述のファブリーツイウスの著作もこの例に洩れない)ように、ゲアラントのばあいにもこの種の論証の不明確さは覆うべくもない。

## 5

シラーをナチズムの先駆者に祭り上げて、ナチズム的大学改革の先導者に仕立て上げようとするこの種の論調は、翌1934年11月10日のヴァイマルとイエーナでのシラー生誕175周年記念祝典で最高頂に達した。政権獲得前後に始まる上からの行政的・法的な管理強化と規制と介入、またナチ大学教員同盟(NSDDB)とナチ学生同盟(NSDStB)に所属する教員・学生などの下からの突き上げと嫌がらせに対して、大学当局は抗するすべもなく屈従した<sup>8)</sup>。

1933年1月7日以降、州政府の命令により大学本館に復活した黒・白・赤(旧帝制国旗)とテューリンゲン州旗(赤・白)のほかに、ハーケンクロイツ旗が掲揚された。この日を期してナチ学生同盟と親ナチ学生諸団体の大量のデモ行進が大学のナチ化促進に大きな揺さ振りを掛けた。4月10日に帝国内相フリック(この年テューリンゲン州内相・国民教育相から昇進)、続いて7月12日にテューリンゲン州首相マルシュラー(Willy Marschler)が、「1818年革命」に関わりのある教授とユダヤ系教授の肖像・胸像を大学の校舎から一掃させた。5月1日(ナチ党はこの日を国際的な労働者の祭典に代って「国民勤労の日」と名付けた)には、講堂に集まった教授・学生の前で州国民教育相ヴェヒトラーは「指導者原理」の大学への浸透を明言する

とともに、親ナチ派学生集団がいかになチ独裁政樹立のための「国民革命」に際立った寄与を示したかを稱揚した<sup>9)</sup>。

ヴェヒトラーは更に6月30日ー7月2日のイエーナ大学創立375周年記念祝典で挨拶をした。そのなかで「個々の歴史的、あるいは理論的な考察」「実社会から遠ざかった学者気質」「生き生きとした革命的歴史と没交渉の生活」を一掃して、「将来、民族精神に根ざした政治的人間にして指導者たるべき人材を養成すべき」大学本来の課題に専心せられたいと述べた<sup>10)</sup>。

この日、この5月にナチ党に加盟したばかりの学長エーザウ (Abraham Esau) が講演を行なった。エーザウはこのなかで、解放戦争に参加したイエーナ大学の学生たちが、ドイツの国民的統一を求めて、ドイツ最初の学生の政治団体「ドイツ・ブルシェンシャフト」(Deutsche Burschenschaft) を結成 (1815.6.12) して、ドイツ人の国民感情を覚醒させた歴史を想起しながら、ドイツの精神生活に寄与したイエーナ大学の役割を高く評価した。そして講演の最後で今こそイエーナ大学は「我らが宰相アドルフ・ヒトラー」の大事業のために喜んで力を尽さねばならないと説いた<sup>11)</sup>。

創立375周年記念式典に続いて、8月26日に、他州に先んじて成立したナチ党のチューリンゲン政権獲得一周年記念祝典が、「ハーケンクロイツ・チューリンゲン制覇一年」をモットーに、大管区指導部 (Gauleitung) と州政府の共催で華やかに行われた。だがこの日は、イエーナ大学の歴史にとって忌むべき最悪の日になった。周知のように、1933年5月10日の夜、ナチ学生同盟主導のもとで、各大学都市で親ナチ学生集団による大がかりな焚書事件がいっせいに起った。イエーナでは他大学より遅れて、8月26日のナチ党による州政権樹立記念日の夜に、「非ドイツ的精神」の書籍がマルクト・ブラッツで大量に燃やされた<sup>12)</sup>。

この年 (1933) 11月9/10日に予定されていたルター誕生450周年記念の祝典は、同月18/19日に延期された。その代わりに11月9日には、1923年11月9日の事件 (ヒトラー一揆) の10周年記念の祭祀が行われた。11月12



日には、国際連盟脱退の是非を問う国民投票と、いわゆる「見せかけの」国会選挙が行われた。この日、学長エーザウは教職員学生に向かって要請した。「ドイツ国のこの祝典に本学の全員が参加することによって、大学とドイツの総統との結びつきをはっきり示すことを私は期待している」<sup>43)</sup>。

6

こうして1933年の年末には、事実イエーナ大学は、全体主義的一党独裁体制のもとに屈服したかに見えた。しかしそれでもなお、ナチ党と州政府側からすれば、大学のナチ化が完了したとは見えなかったらしい。翌1934年2月、ナチ党員の州議会議長で教育政策担当のヒレ (Fritz Hille) は、イエーナ大学教授団に激しい攻撃を浴びせた。ヒレは「教授たちの反動的な精神と階級的偏見 (Kastengeist)」と「新時代」に即応する心構えの不十分さを難詰した。「国民社会主義は『マルクシズムのペスト』から大学を守ってやったのだ。私が今大学に期待するのは、大学が『民族共同体』に心を開き、これに『精神的なこぶし』を突きつけることだ……」<sup>44)</sup>。

実際1933年のこの時点で、ドイツの知性を代表する大学人の服従と沈黙と海外流出は、ドイツの大学と学問を到底取り返しのつかぬ損失に追いやってしまったのである。もちろんイエーナ大学を含めて、ドイツの大学をドイツの大学たらしめてきた伝統的な「学問の自由」も「大学の自治」も「研究と教授の統一」も、言うなればフンボルト以来の大学理念のすべてを疾うに喪失してしまっていた。そしてひたすらナチ・イデオロギーに追従奉仕するロボット人間と擬似科学の生産工場と化していた。1934年2月になっても「新時代」なり「民族共同体」なりに順応するのしなないとあげつらわれる必要もないほどに、すでに大学人は生ける屍でしかなかったのである。

このようなもはや必要ないとも思えるほどのナチ党側からの大学人への非難攻撃を目にするにつれ、これらの大学攻撃が大学側に対して己れの権限を

殊更に誇示し、威圧を加えることで、党内での自己の権力強化と昇進を図る権威主義的思考の表現形式ではないかと思われてくる。この種の権力操作は、やがて1935年以降になって、テューリンゲン州政府内のヴェヒトラー・ザウケル抗争（Wächtler-Sauckel-Konflikt）となって現われる。

## 7

上述したように、シラー誕生175周年記念を控えた1934年のシラー・ヤールには、上からと下からの大学攻撃によって、ドイツの全大学がほぼ潰滅に瀕していたことは、講壇から追放された教員数によっても確認できる<sup>15)</sup>。1932/33年冬学期当時の全ドイツ大学（工科大学・商科大学を含む）に在職していた教員（助手は除く）7979名のうち、1936年4月までに1145名（14.34%）が大学から追放された。同時期のイエーナ大学は、教員199名のうち被追放者は17名（8.54%）と、挙げられた22大学のうち17位であった。例えばベルリン大学（746名中242名、32.43%）、フランクフルト大学（234名中108名、32.33%）、デュッセルドルフ医学アカデミー（20名中10名、50%）と比べれば、イエーナ大学の教員の被害率は少なくすんだ。とはいうものの、ヒトラーの政権掌握前年に成立したナチ党州政権をバックにしたいくつかの強圧的な措置（カールスバート決議以来の悪名高い「大学監督官」Kuratorの復活、恣意的な教授資格の剥奪と罷免など<sup>16)</sup>）に、教授たちが抗すべくもなく屈服したことを考えると、もはやこの時期には、イエーナ大学教授団に追放されるに値するほどの学問的良心の持主がほとんどいなかったことと、イエーナ大学が望み通りナチ的改革大学の模範になりきっていたことを示すだけである。

1934年11月10日のシラー生誕175周年記念祝典は、以上のようなイエーナ大学の惨憺たる状況のもとで、隣接するゲーテの町ヴァイマルとイエーナで同時開催された。祝典の頂点は、ヴァイマルの国民劇場での総統ヒトラー

の出席に加えて、帝国宣伝的ゲッベルスとイエーナ大学講堂でのゲルマニスト・ヴィッテ教授との、共にシラーに寄せる熱烈な崇敬を吐露した演説であった。そしてこの日の最大のハイライトは、ヴィッテ演説に続く州国民教育相ヴェヒトラーの新大学名 „Friedrich-Schiller-Universität Jena“ の改称宣言であった。

## 8

シラー 175 年生誕祝典は、イエーナでは市当局と大学との共催で大学講堂で行われたが、ヴァイマルでは国民劇場 (Deutsches Nationaltheater Weimar) で総統が出席する「国家的行事」(Staatsakt) として挙行された。シラーの生誕記念祝典が国事行為としてヴァイマルで開催されたということは、この祝典がナチ政権にとっていかに政治的色彩の濃い祭典であったかを示している。これは、ヴァイマルの風土へのヒトラーの特別な個人的な愛着に由来するだけではあるまい<sup>17)</sup>。さりとしてヴァイマルを中心とするテューリンゲン州の早期の制覇が政権掌握の第一歩であったことを想起させるための祭典であっただけのことではあるまい。むしろゲーテとシラーの二大詩人がともに居住し活躍したヴァイマルで、シラー崇拜の旗を高く掲げることで、ナチ政権が古典的ドイツ文化の正統な継承者であることを内外に誇示するための祭典であったのだろう。

テューリンゲン州とその文化的中心地ヴァイマルは、ナチ党の政権構想にとって、ミュンヘンからベルリンに至る途中の要衝として、「権力掌握のモデル」たるべき「ナチ党の実験場」(NS-Experimentierfeld) の地歩を占めていた。1930年2月2日のテューリンゲン州内務・国民教育相フリックに宛てたヒトラーの書簡は、この時点でヒトラーの政権獲得構想がかなり具体的・現実的な深謀遠慮から成り立っていたことをわれわれに教えてくれる<sup>18)</sup>。ともあれ、ゲーテとシラーによって代表されるドイツ古典文化の聖地の政治

的・文化的支配は、ドイツの精神・文化全体の支配を意味することにほかならなかったからである。

1929-32年の州議会選挙におけるナチ党の得票数の上昇傾向は、明らかにヒトラーの戦略が成功したことを示している。ナチ党の下部党員の——とくにヴァイマルを中心とする——テロと恫喝まがいの集票運動が功を奏したこともあるが、ナチ党の支持率が州レベルでよりもヴァイマル市の方が高いことに気付く<sup>19)</sup>。例えば1929年12月8日の州議会選挙でナチ党は州レベルで11.3%であったが、ヴァイマルでは26.4%の得票率を獲得して、ドイツで初めて二名のナチ党員が州政府に参加した。フリックは内務兼国民教育相に、マルシュラー(Willy Marschler)は経済・法務相に就任した。そのうちフリックは、既述した人種差別主義者ギュンター教授の招聘に見られるように絶大な権力を行使した<sup>20)</sup>。

1932年7月31日の州議会選挙では、ナチ党は州レベルで42.5%、ヴァイマルで44.2%の得票率を得て、大管区長官(Gauleiter)ザウケル(Fritz Sauckel, 1894-1946)のもとで、最初のナチ州政府が作られた(1932.8.26)。チューリンゲンのナチ政権は、1932年12月の州選挙で一時後退を見せたが、前記ザウケルが帝国地方長官(Reichsstatthalter)に任命(1933.5)されると、ヴァイマル制覇を足掛りにチューリンゲン全土を「統統の防衛大管区」(Trutzgau des Führers)に仕立てあげた。

シラー年を迎えた1934年のチューリンゲンとその中心地ヴァイマルは、ミュンヘンからベルリンへの政権構想の跳躍台と実験場たるべき役割を申し分なく果たし終えていた。ヴァイマルはヒトラーにとって緊張緩和と憩いの場所であった。ヒトラーが1926年以来、いかにしばしば好んで「ホテル・エレファント」に投宿したかを思い出すだけで十分である。「私にはパイロイトが必要であるように、ヴァイマルが必要なのだ」とヒトラーは語ったという<sup>21)</sup>。プライベートな国民劇場での観劇と公園の散歩とコーヒー店でのひと休み——、ゲッベルスは日記にこう書く。「ヒトラーとコーヒー店で。こ

のヴァイマルではかれは人間だ」<sup>22)</sup>。

9

ヴァイマルのシラー週間 (Schillerwoche) の第1日目11月7日に、『ヴェレンシュタインの陣営』の野外劇と国民教育相ヴェヒトラーのシラー講演、そして夜には松明行列が行われた。そして11月10日の国民劇場での国家的行事を迎えるまで、同様の儀式的な催事が多彩に続けられた。11月10日当日、通常の褐色の党制服ではなく、燕尾服を着た総統と政府要人・党幹部多数の列席するなか、帝国啓蒙宣伝相ゲッベルスが登壇した。ゲッベルスはまず総統と全国民に呼びかけた („Mein Führer! Meine Volksgenossen und Volksgenossinnen!“) あと、開口一番ナチズムの先駆者としてのシラーを称揚することからシラー論を展開した<sup>23)</sup>。

「シラーがもしこの時代に生きていたとすれば、かれはわれわれの革命の偉大な文学的先駆者であったであろう。かれは全力を尽くして革命に献身するに適わしい性格をもっていた。またかれは革命を創造的に形成するのに必要な芸術的天才をもっていた……」

この出だしの数行をもってゲッベルスは、シラーの性格 (Charakter) と芸術的天才 (künstlerisches Genie) とをナチズム革命に結びつける。「革命の詩人」となるに必要な「天才」と「性格」——「この二つはシラーの中で絶妙に調和し統一されていた」とゲッベルスは語る。ここからかれは、シラーがいかに現代の「われわれ」の一人であり、現代性を有するとともに、永遠の生命をもつかを論証しようとする。

まずかれは「シラーはわれわれ同志の一人であった」と強調し、「これこそわが血の血、わが肉の肉」と聖句の引用で自説の補強を試みる<sup>24)</sup>。更にこの演説の終りの部分で、ゲッベルスはシラーを「われわれ」のものだとする自説を、シラー自身の戯曲『群盗』の一場面とゲーテの詩の引用をもって説

明する。かれは、『群盗』第一幕の主人公カール・モーアの台詞「法律が大人物を作ったためしはないが、自由は巨人傑物をはくくむ。……おれをわが党の先頭に立たせろ、ドイツの国は共和国となれ」<sup>25)</sup>は、「まるでわれわれのために書いてくれたかのような気がしないだろうか」と語る。そして演説の終りで、死せる友人シラーの「鐘の歌」に寄せるゲーテのエピローグ (Epilog zu Schillers „Glocke“, 1805) の数行 (z. 25-32) の一つを引用して締めくくる。「何となればかれはわれわれのものだったから！」

この演説でゲッベルスは、「われわれのシラー」を際立たせるとともに、また随所でシラーの現代性と永遠性を展開する。

「シラーの作品は、詩人というものが時代のなかに没し去ることなく、現代的 (zeitnahe) でありうること、真の天才には時代に立脚して時代を形造り、そうすることによって言葉の最も真実な意味で時代を超越して (zeitlos) 生きる可能性が与えられていることを立証する。……シラーはかれ自身の時代にとってばかりではなく、われわれの時代にとって今もなお最も現代的な劇的な形成者 (Gestalter) である。かれが具体化した登場人物は、永遠に人間的なるものの躍動、決して色褪せることなく、作者が芸術的表現を与えた時と同じく、今日でも若々しく生存能力のある印象を与えるあの躍動を内部に蔵している」

ゲッベルスは再び聖句を引用して (ただし形を変えて)、「かれは招かれているだけではなく、選ばれている少数派の一人であった」<sup>26)</sup>と、シラーの人間存在を規定し、「かれの道德的偉大さ」を称える。ゲッベルスは専らシラーの戯曲作品の解釈を通して、シラーは芸術家として、また奮闘する戦士、悩める人間として、「一日に 14 時間も根気よく仕事をして『自分の才能を生かした mit seinem Pfunde wucherte』 (ルカ伝, 19, 11-27)」と語る。芸術家シラーが生と詩作と死において証明したのは、「天才が性格と重なり合って、両者が本質的に統一しながら地上の子の最高の幸福を人格に見るときになってはじめて、天才は最後の完成を味うのだ」と演説の終りに近い個所で

こう説く。

ゲッベルスは詩や美学・歴史関係の論文・著作からではなく、『群盗』(1781)から『ヴィルヘルム・テル』(1804)に至る数多くの戯曲作品からシラー像を作りあげる。だが期待さるべき人間像としてナチズム運動の先導者に祭り上げて、聖書やゲーテの引用句を交えながら、総統ヒトラーをシラーの復活再来であるかのように思わせかねない牽強付会に出会うと、いささか辟易しないわけにはいかない。ヴァイマルのドイツ国民劇場(Deutsches Nationaltheater Weimar)とえば、誰しも知る通り、ゲーテとシラーが手を取り合った記念像が正面入口に立ち、1919年にドイツ最初の民主的憲法——ナチズム運動の不倶戴天の怨敵——が成立した記念碑的な劇場であり、ドイツ最高の文化遺産の一つである。それだけに、ナチ政権主催のヴァイマル国民劇場でのシラー生誕175周年記念祝典は、(フォンドゥングやモッセなら「政治的カルト」「呪術による現実操作」と言うだろう<sup>27)</sup>歴史の一大逆説であったと言ってよかろう。

## 10

ヴァイマルでのゲッベルス演説が行われたと同じ日、イエーナ大学ではヴァイマルでの国家的行事の華々しさと比べれば、きわめて地味にシラー生誕記念祝典が行われた。式典の眼目は、かつて本大学に教授として奉職したドイツ古典派の代表的詩人シラーの人と業績と、教授としての実績を称揚顕彰するというよりは、むしろシラーをナチズム的大学改革を先導するシンボリックな先駆者として印象づけることにあった。この日のハイライトは、ヴィッテ教授の講演「シラーと現代」に続いて登壇した州国民教育相ヴェヒトラーのイエーナ大学にシラーの名を冠した新名称の宣言であった。

哲学部の員外教授でゲルマニストのヴィッテは、まずシラーの生活と創作活動と理想を求めて奮闘する真剣な努力は、若い世代にとって未来を示す指

導者であることを示そうと努める<sup>28)</sup>。だがここには月並な表現ばかりが目立つだけで、とりわけ新しい知見は見当らない。かれの関心は、「国家に対する個人の関係」を主としてシラーの美学論文『人間の美的教育について、一連の書簡』(1793)——それも第4書簡に限定して——をなぞりながら自説を展開することにある。個性的な人間を理想主義的人間に教化する(veredeln)にはどうすれば可能なのか、多様性を放棄することによってしか統一を実現できない国家観などは不完全ではないか、シラーの美的教育論から出てくるこれらの疑問に、ヴィッテ教授は独裁制の永遠の基本テーゼをもってこう答える。

「内面的な人間が自分自身と一致しているのであれば、自分の振舞いをどんなに普遍化しても、かれは自分の独自性を維持するだろう。そして国家は常に自分自身の遠方まで見える現象となるだろう。だがある国民の性格のなかで道徳性が感覺性を抑圧することによってしか存続しえないのであれば、国家は市民に対して厳しい法の執行を認めざるをえないし、また国家は犠牲にならないために、自分に敵対する個を容赦なく踏みつけねばならない……」

ヴィッテのここでの論法は、専ら『人間の美的教育論』全27篇の書簡中の第4書簡をなぞりつつ、特に終りの部分は原文とほとんど変わらずに援引することでもって自説の補強に役立たせている。こうしたシラー引用の乱発でもって、シラーの描く「美的国家」のイメージを地上に引きづり落として、ナチ独裁政権の支持表明の道具と化する。ゲルマニストとしての哲学的・文学的な政治的論説ではもはやなく、実像をねじ曲げてでも時の権力に媚を売る政治的信条告白、というよりはむしろ地位保全目当ての哀願にも似た心情告白にほかならない。

ヴィッテはナチ黨員ではなかった。ヴィッテの例は、非黨員の方が事と次第によっては返って黨員以上の役割を果しうることを立証している。創立400周年記念刊行の『イエーナ大学史』(全2巻、1958/1962)は、「1934年



にこれほど低落しえた学者はほとんどいなかった」とヴィッテを評している。この評語に誤りはない<sup>29)</sup>。

## 11

ヴィッテのシラー講演に続いて、ヴェヒトラー州国民教育相はシラーのイエーナ大学教授としての功績を称えた。

「光輝あるドイツの大学のうちで、本大学の名がこの数日〔シラー記念週間〕のうちに明るく輝いていることは、誇らしい喜びをもってわれわれ後進の者の心を満たしてくれる。この栄光と輝きが消えることなく、遙かな未来に生かし続けられるようご配慮せられたい。それゆえ、テューリンゲン州政府は、フリードリヒ・シラーの名前と大学の名称を互いに永遠に結びつけることに決定しました」

こう語ったあと、ヴェヒトラーは学長エーザウに大学名の改称証書を手渡した。学長は謝意を表して、本大学は「つねに総統に忠実に従い、すべてを捧げて大学に課せられた課題を名誉をもって実現するであろう」と宣言した<sup>30)</sup>。

イエーナ大学にシラーの名を冠する動きは、1933年のイエーナ大学創立375年記念の際に持ち上がった<sup>31)</sup>。ハンブルク、ケルン、ライプツィヒ、ロストックの各大学を除けば、当時のほとんどの大学は、大学の創設者（その多くは領邦君主）か、大学に功績があったか因縁の深い人物の名を付していた。ところで前年にハレ大学がルター（Martin Luther）の名を、グライフスヴァルト大学がアルント（Ernst Moritz Arndt）の名を付するに及んで、イエーナ大学は1933年の創立375周年記念を期に、大学名に創設者のヨハン・フリードリヒ（Herzog Johann Friedrich I. 1503-1554）の名を冠することを議題に載せた。しかしこの名は時代に適応しないとして、大学はこの名の適用を断念した。当然のことながらゲーテの名が挙げられた。

周知のように、ゲーテは1775年にヴァイマルに移住して以来、ザクセン・ヴァイマル公国（1815年以降ザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ大公国）の枢密顧問官として晩年に至るまで長期にわたってイエーナ大学の管理運営に深く関わり合った。とくに大学の自然科学系諸施設と図書館の拡充と近代化、有為な人材の教授陣への招聘（哲学部に限定してみても、シラー、フィヒテ、シェリングなどの招聘、ヘーゲルへの種々の配慮など）等の積極的な大学政策によって、当時のイエーナ大学の研究・教授の質を飛躍させ、イエーナ大学の黄金時代を現出せしめた。その功績は優にイエーナ大学にその名を冠するに足るものだった<sup>32)</sup>。だがゲーテの名はすでに、ゲーテの生誕地のフランクフルト大学（Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main）が荷っていた。

イエーナ大学にその名を与えるのに適わしい人物がゲーテでないとすれば、おのずからシラーに順番が回ってくるのは当然であった。

## 12

シラーの理想主義的・倫理的な人間資質と作風、またその古典的・教育的な規範性、1789年の教授就任講義で一躍イエーナ大学の名を高からしめ、この小さな町をドイツの文学・哲学の中心地に押し上げた功績、さらに19世紀を通じて「国民詩人」（Nationaldichter）、「指導者にして救世主」（Führer und Heiland）としての絶大な人気を保持してきた「シラー崇拜」（Schiller-Verehrung）<sup>33)</sup>、これらを考えると、（教授としての勤務実態——1789 SSから1799 SSまでの21学期中、実際に行なった講義は5学期だけだった——に難点はあれ、またゲーテのような行政的・物的貢献度はゼロだったにせよ）イエーナ大学にその名を付け加えるのに不足はなかっただろう。

この時期に至っては、大学自治を完全に喪失してしまっていた大学側には、

大学名の改稱には何の決定権もなかった。この点で決定的な役割を果たしたのは、これまでに事あるごとに登場した地元のナチ党の最有力者で州政府の国民教育相のヴェヒトラーである<sup>34)</sup>。かれの意図は、ドイツ古典文学の代表的詩人・劇作家シラーの名を押し戴きながら、シラーを「ナチズムの先駆者」「ヒトラーの戦友」とする論説と、宗教的祭祀 (Kult) と化した国民的なシラー崇拜を拠り所にして、シラーの名を大学名に付け加えることによって、他大学に先んじてイエーナ大学をナチ的政治大学の模範に仕立てることだった。

多くの教授たちは「未来に向う指導者」としてのシラー像の形成に協力させられた。そしてナチ党は、19世紀に広く普及していた呪術宗教的とも言えるシラー崇拜を、ナチズム運動のなかに取り込んで、拡大再生産したのである。シラー崇拜は1939年9月に第二次大戦が始まるまで持続した。開戦後は、ナチ党はゲーテの方に利用価値を見出した。ヨーロッパ制覇を狙うナチ政権の戦略からすれば、局地的なシラーよりも、汎ヨーロッパ的な普遍人 (uomo universale) であるゲーテの方が利用し甲斐があったからだろう。しかしともあれ、1945年の終戦まで、フリードリヒ・シラー＝イエーナ大学はナチズムの大学の模範であり続けることができたのである。

## 13

イエーナ大学にシラーの名が付せられたのは、シラーその人とかれの創作活動が後世に与えた影響を考えれば、それ自体としては何ら咎めるところはない。むしろ喜ぶべきことだろう。だが時の政権による政治的操作の結果、古典的な文化遺産が政策実現のために歪曲され、大学名まで改称されると、シラーの名が政治的イデオロギーの道具に供せられたという悲憤は消え難く残る。第一、シラーの残した著述のどこをどう見ても、到底シラーに「ナチズムの先駆者」と呼ばしめるような可能性を全く見出せないことは誰

の目にも明らかであるからだ。

シラーの理想主義は、人間性の普遍的目的を道徳的完全性に求める。『人間の美的教育論』の第6書簡が示すように、かれの理想主義は、近代に入って、とくにフランス革命を契機に顕在化してきた人間の断片化と全体性の喪失という事態を認識することから、全体的な調和のとれた人間性の回復を求めることにある。だがシラーのこの思想が全く理解もされずに、一党独裁体制維持のために、その名のみが政治的に悪用されたことは、思うに一大痛恨事としか言いようがない。

第二次大戦終結後、イエーナ大学は12年に及ぶナチ独裁体制への奉仕から、新たにソヴィエト占領地区、のちのDDR（ドイツ民主共和国）のSED（ドイツ社会主義統一党）への奉仕に切り替えさせられた。シラーの名は、今度はスターリン主義的社会主義社会の実現を目指す模範的大学の先駆者たるべき役割を荷わされることになった。ただしDDRでは——これはナチ統治下では絶対にありえなかったことだが——『美的教育論』第6書簡で示したシラーの近代文化批判が、新たな位相のもとに高い評価を得るに至った。シラーの名は改めて「未来へ向かう指導者」の役割を与えられることになった<sup>35)</sup>。再統一後の今日、フリードリヒ・シラー＝イエーナ大学は苦難に満ちた過去を全く知らぬげに、今や1万人以上の学生を擁してザーレ河畔にたたずんでいる。

### 《参考書目》

（カッコ内の太字は引用略記号を示す）

#### 1. ナチ時代の大学

Helmut Seier: Der Rektor als Führer. Zur Hochschulpolitik des Reichserziehungsministeriums 1934-1945. In: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, 12. Jg. (1964), S. 105-146.

Universitätstage 1966. Nationalsozialismus und die deutsche Universität (Veröffentlichung der FUB), Berlin 1966.

Erziehung und Schulung im Dritten Reich, Tl. 2: Hochschule, Erwachsenenbil-

dung, hrsg. v. Manfred Heinemann, Stuttgart 1980.

Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte, Bd. V. (1918-1945), hrsg. v. Dieter Langewiesche, München 1989 (**HDBG**)

Helmut Heiber: Universität unterm Hakenkreuz, 2Tle. 3Bde. München u. a. 1991-1994. (**Heiber**)

2. ナチズム時代のシラー

Georg Ruppelt: Schiller im nationalsozialistischen Deutschland. Der Versuch einer Gleichschaltung, Stuttgart 1979 (**Ruppelt**)

Claudia Albert (Hg.): Deutsche Klassiker im Nationalsozialismus. Schiller・Kleist・Hörderlin, Stuttgart 1994 (**DKNS**)

ders: Schiller im Spannungsfeld von wissenschaftlicher und populärer Rezeption, In: Das Dritte Weimar. Klassik und Kultur im Nationalsozialismus, hrsg. v. Lothar Ehrlich u. a. Weimar u. a. 1999. S. 75-88.

ders: Schiller im 20. Jahrhundert. In: Schiller Handbuch, hrsg. v. Helmut Koopmann, Stuttgart 1998. S. 773-794.

3. イェーナ大学史

Geschichte der Universität Jena 1548/58-1958, Festgabe zum vierhundertjährigen Universitätsjubiläum. 2Bde, hrsg. v. Max Steinmetz, Jena 1958/1962 (**GUJ**)

Alma Mater Jenensis. Geschichte der Universität Jena, hrsg. v. Siegfried Schmidt u. a. Weimar 1983.

Thomas Pester: Im Schatten der Minerva. Kleine illustrierte Geschichte der Universität Jena. 1996. (**Pester**)

»Kämpferische Wissenschaft« Studien zur Universität Jena im Nationalsozialismus, hrsg. v. Uwe Hoßfeld u. a. Weimar u. a. 2003. (**KW**)

4. テューリンゲン州政府とヴァイマル市のナチ化過程

Geschichte Thüringens, hrsg. v. Hans Patze u. a. 5. Bd. 2Tl. Köln u. a. 1978. S. 506-545/622-626 (**GTh**)

Quellen zur Geschichte Thüringens. 1818-1945, hrsg. v. Jürgen John, Erfurt 1996 (**Quellen**)

Weimar 1930. Politik und Kultur im Vorfeld der NS-Diktatur, hrsg. v. Lothar Ehrlich u. a. Weimar 1998. S. VII-XXXVIII.

Jürgen John: Der NS-Gau Thüringen 1933 bis 1945. Grundzüge seiner Struktur und Funktionsgeschichte. In: Klassikerstadt und Nationalsozialismus. Kultur und Politik in Weimar 1993 bis 1945, Weimar 2002, S. 25-52/198-209.

Holm Kirsten: »Weimar im Banne des Führers« Die Besuche Adolf Hitlers 1925-1945, Weimar u. a. 2001 (**Kirsten**)

## 5. その他

- Weimar. Lexikon zur Stadtgeschichte, hrsg. v. Gitta Günther u. a. Weimar 1993. (WL)
- Karl Dietrich Bracher: Die deutsche Diktatur. Entstehung, Struktur, Folgen des Nationalsozialismus, Köln 1993 (7. Aufl.)
- Thomas Ellwein: Die deutsche Universität. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart. Wiesbaden 1997 (Lizenzausg. n. d. 2. Aufl. 1992). (Ellwein)
- Enzyklopädie des Nationalsozialismus, hrsg. v. Wolfgang Benz. u. a. München 1998 (2. Aufl.)

## 《註》

- 1) テューリンゲン州とその文化的中心地イエーナ・ヴァイマル (Jena-Weimar-Doppelstadt) のナチ化過程は、10 数年来の地方史研究の進展とナチ研究の精緻化とによって、精度の高い研究成果を多数生産している。参考書目 4 は、それらのうちのほんの僅かなものに過ぎない。
- 2) Pester, S. 115f; GUJ, I. S. 600.
- 3) Pester, S. 117.
- 4) Pester, S. 117-119.
- 5) Ruppelt, S. 25ff./203ff.
- 6) GUJ, I, S. 623.
- 7) Heiber, Tl. I. S. 224; KW, 51.
- 8) GUJ, I, S. 620-625.
- 9) ebd. S. 624.
- 10) ebd. S. 625.
- 11) ebd. S. 625.
- 12) この大がかりな焚書事件を、ゲッベルス宣伝相は、5月10日夜のベルリンの現場での演説 (Ellwein, S. 300f.) で、「下から」の盛り上がりで起こったことをしきりに強調するが、この事件がナチ当局のあらかじめ仕組んだ暴挙であったことは改めて言うまでもない。
- 13) KW, S. 52.
- 14) KW, S. 52.
- 15) zit. b. HbBG, S. 226.
- 16) KW, S. 50; GUJ, I, S. 620, 624.
- 17) Kirsten, S. 149-153. ヒトラーが1925年以降、いかにヴァイマルの風土に愛着を寄せ、ホテル・エレファントに好んで投宿したかは、キルステン の調べあげたヒトラーのヴァイマル・エレファント訪問・宿泊のクロノロジーが教えてくれる。これによると1925年には5回であったが、1930/31年はそれぞれ6回、1932年

には8回と漸増し続けた。大戦突入とともにヴァイマル訪問, エレファント宿泊は激減した。

(序でながら今や五つ星に輝くホテル・エレファントは, 豪華版のゲスト・インフォメーションにかなり詳しい当ホテルのクロノロギーを掲載しているが, ヒトラーの宿泊については全く言及していない)

- 18) Ein Brief Hitlers zur Regierungsbildung in Thüringen (2. 2. 1930). Quellen, S. 134-137.

Fritz Dickmann: Die Regierungsbildung in Thüringen als Modell der Machtergreifung. Ein Brief Hitlers aus dem Jahre 1930. In: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, 14. Jg. 1966. S. 454-464.

- 19) GTh, S. 506, 518; WL, S. 321.

- 20) この両省のトップへの2名のナチ党員の就任をヒトラーは殊のほか喜んだ。手紙にこう書いている。「この両省を手に入れて, 容赦なくねばり強くその権力を行使する者は, どうえらい影響を及ぼすことができる」。Quellen, S. 135.

- 21) Kirsten, S. 13.

- 22) ebd., S. 12.

- 23) ゲッベルスの演説全文は Ruppelt (Anhang), S. 154-156 に従う。

- 24) 「創世記, 2-23」, 正しくは「これこそわが骨の骨わが肉の肉」 („Das endlich ist Bein von meinem Bein/und Fleisch von meinem Fleisch.“ – Einheitsübersetzung, 1980)

- 25) 訳文は久保栄訳『群盗』(岩波文庫)による。

- 26) 「マタイ伝, 22-14」 「それ招かれる者は多かれど, 選ばる者は少し」 („Denn viele sind gerufen, aber nur wenige auserwählt“ – Einheitsübers.)

- 27) Klaus Vondung: Magie und Manipulation – Ideologischer Kult und politische Religion des Nationalsozialismus. Göttingen 1971.

Georg L. Mosse: Die völkische Revolution. Über die geistigen Wurzeln des Nationalsozialismus (Aus dem Engl.) Frankfurt 1991.

ders: Die Nationalisierung der Massen. Von den Befreiungskriegen bis zum Dritten Reich (Aus dem Engl.) Frankfurt/NY 1993.

- 28) Arthur Witte: Schiller und die Gegenwart (Jenaer akademische Reden, H. 20), Jena 1935.

- 29) GUJ, I, S. 626. ヴィットは貧農の生まれで, 篤志家の学費援助で大学に学び, のち教授職に就いた。ヴィットにさまざまな屈折があったであろうことは想像できる。ミュンヘンに学んだ(1924/25)ときに, 反ユダヤ主義者, 反マルクス主義者としてナチ党に関心を寄せたが入党はしなかった。ヴィットは1945年, ソ連軍の進駐とともに自殺した。「ロシア軍がやって来ては, 学問の理想のために生きることは不可能だ」と遺書に書き記したという。GUJ, II, S. 614; KW, S. 857f.

30) GUJ, I, S. 626.

31) KW, S. 52.

32) ゲーテのイエーナ大学への寄与については以下の拙論を参照。杉浦忠夫「ゲーテとシラーとイエーナ危機——大学史の観点から——」『影』46号(2004.5) S. 36-67.

33) 19世紀全般のシラー崇拜の展開、とくに1859年に頂点を迎えたシラー生誕100周年記念の諸相については次下を参照。

Karl Obermann: Die deutsche Einheitsbewegung und die Schillerfeiern 1859. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 3 (1959), S. 705-734.

Rainer Noltinius: Schiller als Führer und Heiland. Das Schillerfest 1859 als nationaler Traum von der Geburt des zweiten deutschen Kaiserreichs. In: Peter Düding u. a. (Hg.): Öffentliche Festkultur. Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg. Hamburg 1988, S. 237-258.

34) KW, S.52.

35) DDR 政治体制を嫌って、ともにライプツィヒ大学から西ドイツに移住した2名の教授(哲学者リットと文学史家ハンス・マイヤー)のシラー論による。

Hans Mayer: Schiller und die Nation, Berlin (Ost) 1953. Theodor Litt: Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt. Bonn 1955.

(すぎうら・ただお 名誉教授)